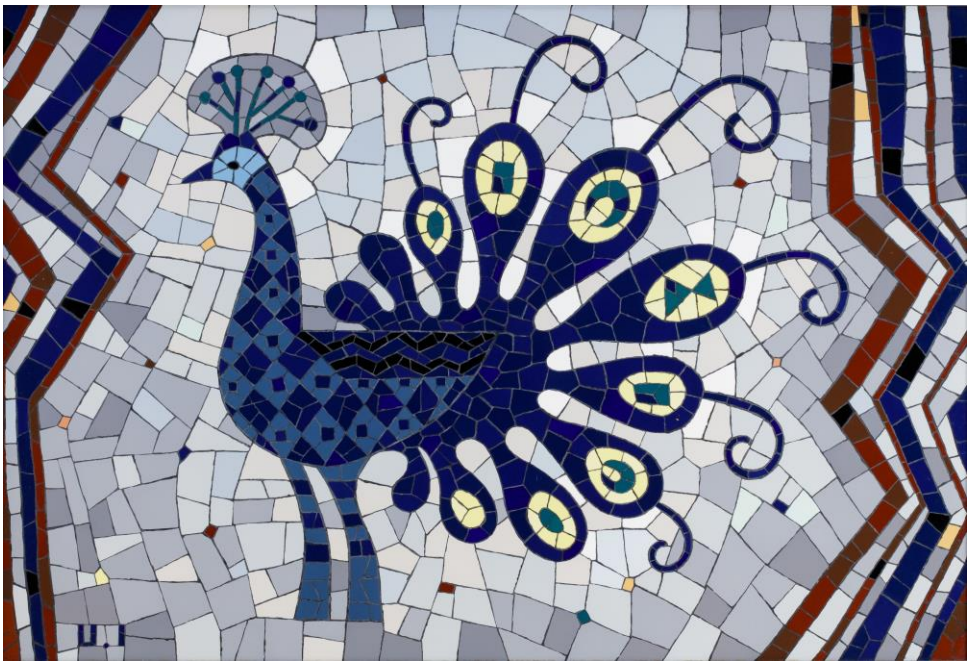
PRESS RELEASE

泉屋博古館東京 SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM TOKYO

特別展 昭和モダーン モザイクのいろどり
板谷梅樹の世界

同時開催　「特集展示 住友コレクションの茶道具」



昭和モダーン、モザイクのいろどり

特別展 板谷梅樹の世界

SHOWA MODERN, An Introduction to Umeki Itaya

2024年8月31日(土)－9月29日(日)

《展覧会概要》

現在、その魅力が改めて見直されている「昭和」という時代、エキゾチックなモザイク作品で人々を魅了した板谷梅樹（いたや・うめき、1907-1963）。かつての旧日本劇場のモザイク壁画、瀟洒な飾箱や飾皿、帯留やペンダントヘッドなど、どれも清新な色彩と可憐な意匠にあふれています。

近代陶芸の巨匠・板谷波山（いたや・はざん、1872-1963）の息子であった梅樹は、父が砕いた陶片の美しさに魅了され、20代半ばから陶片を活用したモザイク画の制作を志します。その代表作は旧日本劇場一階玄関ホールの巨大なモザイク壁画（昭和８年作、原画：川島理一郎）で、当時話題となりました。その後、帝国美術院展覧会（帝展）を中心にモザイク作品を発表し、作家としての活動を本格的にスタートさせます。梅樹作品は綿密な作業と時間を要するため、残された作品は決して多くなく、やがてモザイク作家・板谷梅樹の名は忘れられていきました。しかし近年、昭和モダンのアーティストとして、その再評価の機運が高まっています。

本展は、梅樹作品を一堂に集めた初の展覧会となります。ノスタルジックな香り漂うモザイクの世界をお楽しみください。

併せて、住友コレクションの茶道具をご紹介いたします。

（出品点数 約100点、会期中の展示替えなし）

《基本情報》

展覧会名	特別展　昭和モダーン　モザイクのいろどり　板谷梅樹の世界
会　　期	2024年8月31日（土）～ 9月29日(日) （巡回：板谷波山記念館　2024年4月20日(土)～6月23日(日)）
開館時間	11:00～18:00　※金曜日は19:00まで開館　※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日、9月17日・24日（火）※9/16・23（月・祝休）は開館
入 館 料	一般1,200円(1,000円)、高大生800円(700円)、中学生以下無料 ※20名様以上の団体は( )内の割引料金 ※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者１名まで無料
会　　場	泉屋博古館東京　〒106-0032　東京都港区六本木1-5-1 https://sen-oku.or.jp/tokyo/ TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル)
監　　修	荒川正明（学習院大学教授）
主　　催	公益財団法人泉屋博古館、板谷波山記念館、毎日新聞社
後　　援	東京メトロポリタンテレビジョン株式会社
企画協力	公益財団法人波山先生記念会

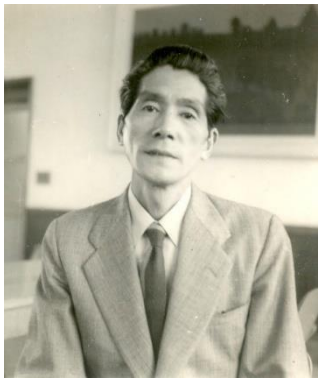
《本展のみどころ》

1．美術館初の板谷梅樹回顧展

板谷梅樹は、明治40(1907)年東京・田端に陶芸家・板谷波山の五男として誕生しました。 18歳で明治大学を中退し、単身ブラジルへ渡航。ドイツ人経営の農場で働くものの、一年後に帰国します。帰国後、梅樹は波山の友人で、日本のステンドグラスの先駆者・小川三知の工房に出入りするうちに、ステンドグラスやモザイクに興味を持ったに違いありません。

昭和8(1933)年、日本劇場一階玄関ホールのために、陶片などを用いて高さ3mの巨大モザイク壁画を制作しました（現存せず）。第14回帝展に同作を元にした壁画を出品し初入選し、以降、日展を中心にモザイク作家として活動しました。昭和38(1963)年5月5日、逝去。

昭和モダニズムを彷彿とさせる鮮やかな色彩の作品で、モザイク作家として活躍した梅樹の作品を紹介します。



板谷梅樹ポートレート（40代）
個人蔵

2．現存する梅樹作品最大のモザイク壁画

高さ約370㎝におよぶ《三井用水取入所風景（みいようすいとりいれじょふうけい）》は、昭和29(1954)年に横浜市の依頼で梅樹が制作し、同年、第10回日展にも出品された作品です。

本作は、明治20(1887)年、日本初の近代水道施設としてつくられた三井用水取入所を中心に、富士山麓の豊かな自然が表現されました。富士山の山麓に位置する相模川と道志川の合流地点に佇むレンガ造りの三井用水取入所は、蒸気機関で駆動する揚水ポンプを使い水を汲み上げる画期的な施設でした。

その壮大な姿をお楽しみください。

板谷梅樹《三井用水取入所風景》（部分）
昭和29（1954）年　板谷波山記念館蔵

3．父・板谷波山との競演

梅樹の父・波山は、理想の作品づくりのためには一切の妥協を許さず、端正で格調高い作品を数多く手がけました。かつて板谷波山の田端旧宅から、波山が明治39(1906)年に構築した窯跡が発掘されました。窯跡からは、明治時代末期のデビュー当時の作品、大正時代の彩磁、葆光彩磁、円熟期の青磁、白磁、鉄釉磁、茶道具などおびただしい陶片が発見されました。それと共に発見されたのは、梅樹が手掛けたモザイクやステンドグラスの材料にされた素材類でした。梅樹は幼い頃から波山が焼損じの美しい破片を土中に埋めるのを度々見て、色々の形に砕いたり、寄せ集めて玩んだりしていたそうです。この幼少期の体験がのちにモザイク作家・板谷梅樹誕生へと繋がりました。波山の田端旧宅跡から発見されたこれらの陶片やガラス片は、モザイク作家として命を燃やした梅樹が生きた確かな証しでもあります。

波山の代表作の一つ、重要文化財 《葆光彩磁珍果文花瓶》は、大正6(1917)年波山芸術を愛した住友家15代当主住友吉左衛門友純（号・春翠、1864-1926）によって購入され、泉屋博古館東京に継承されています。春翠は、波山作品と共に妻・まるや長男・菊男の作品なども入手しました。本展では、板谷ファミリーの作品も紹介します。

板谷梅樹《 ランプシェード（ 台座：板谷波山）》
昭和 10 年代
㊫長谷川コレクション

《展示構成》（予定）

＊作品名は箱書を基準に器形を記し、一部の作品は模様から名称を作成しています。
＊制作年は帝展・日展出品作などを基準に年代を推定しています。

第Ⅰ章：「モザイクの世界で」

「モザイク」という装飾美術の技法は紀元前からみられ、古代ギリシア・ローマ時代の作品は後世の芸術家達をとりこにしました。石やガラスなどのかけらを寄せあわせ、絵や模様を表すモザイク画は19世紀末、アール・ヌーヴォーの流行と共に日本にも本格的に伝わります。板谷梅樹は父・波山が砕いた陶片の美しさに魅了され、子供の頃から陶片を色々な形に砕いたり、寄せ集めて遊んでいたことがモザイク画制作のきっかけとなった、と語っています。出世作ともいえる旧日本劇場のモザイク壁画は、古代ギリシアに着想を得た洋画家・川島理一郎（1886-1971）が下絵（図録参考出品p.18）を手掛けた大作です。梅樹は、白磁や青磁など波山の陶片をアクセントに、様々な陶片やガラス片を組み合わせ本作を制作しました。当時大変な話題となり、モザイク作家・板谷梅樹の存在を印象づけます。
その後、帝展（帝国美術院展覧会）、日展（日本美術展覧会）などにモダンな工芸作品を出品し、晩年は日展評議員としてその地位を確立します。昭和29（1954）年には、高さ3mを超える大作、《三井用水取入所風景》（No.6・ホール展示）を制作します。梅樹が目指した美しいモザイクの世界をどうぞお楽しみください。

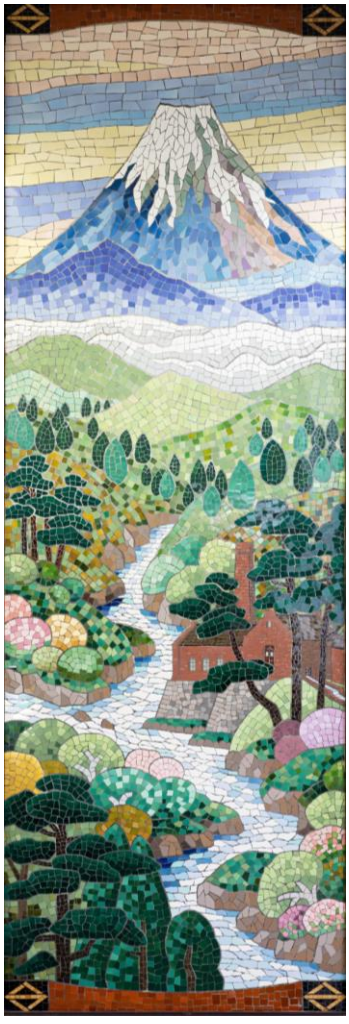
（参考展示）旧日本劇場一階玄関ホール

戦後、長らくベニヤで覆われていたモザイク壁画は、日劇の閉館後、解体時に再びその姿を現しました。
東京会場では、パネル展示のほか、現存する川島理一郎作の下絵（栃木県立美術館蔵）、解体時の記録映像もあわせて紹介します。

高さ約3.7m、重さは約800kg！
本展を待っていたかのように
奇跡的に再発見された大作が、
東京会場にも巡回します！

板谷梅樹《笛を吹く人》
昭和初期　個人蔵

板谷梅樹《花》
昭和30年代　個人蔵



板谷梅樹《三井用水取入所風景》
昭和29（1954）年　板谷波山記念館蔵

板谷梅樹《鳥》
昭和34(1959)年　個人蔵

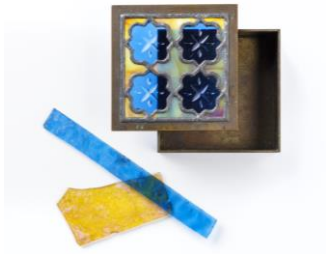
板谷梅樹《きりん》
昭和30年代　個人蔵

第Ⅱ章：「日常にいろどりを」

板谷梅樹は、生涯を通じてモザイク画のみならず、日常をいろどる身近な作品を制作しました。梅樹は、ブラジルから帰国した昭和2（1927）年、父・波山と東京美術学校時代の同期であった小川三知（1867-1928）のもとで、アメリカ 式（ティファニー方式）ステンドグラスを学びます。技術を学び始めてまもなく、個人宅のために、三知と共にアール・デコ風のステンドグラス《花》（No.32）を手掛け、作家としての第一歩を踏み出しました。当時は、大正12（1923）年の関東大震災を契機に、日本人の住宅環境が急激に変化した時代でした。鉄筋コンクリート造りの住宅が増え、家具や工芸のデザインにも注目が集まります。

梅樹も波山の辰砂釉の作品を応用し、欧米風の邸宅には欠かせないランプシェード（No.34）を制作します。昭和12（1937）年、30歳頃には、ガラス作家の各務鑛三（1896-1985）や鋳金作家の香取正彦（1899-1988）など若手工芸家グループ「六色会」を結成します。この頃より、関東在住の工芸家団体「東陶会」、「茨城工芸会」など美術展への出品を続けつつ、銀座・和光にて和装用の帯留、洋装用のペンダントなどを販売しました。色とりどりのかけらを集めたモダンなアクセサリーは、現在でも色あせることなく、その輝きをとどめています。

板谷梅樹《飾箱》
昭和10年代　個人蔵



（上）板谷梅樹《莨箱》昭和10年代 個人蔵
（下）ステンドグラス片 板谷波山記念館蔵

板谷梅樹《帯留》
昭和20年代　個人他

第Ⅲ章：「住友コレクションと板谷家」

近代陶芸の巨匠 板谷波山（本名・板谷嘉七）は、明治5（1872）年茨城県下館町（現・筑西市）に生まれました。波山は、明治22年東京美術学校（現・東京藝術大学）彫刻科に入学、岡倉天心や高村光雲に師事しました。明治36年には東京・田端の地に移り、陶芸家「波山」として数々の名作を生みだします。昭和9（1934）年帝室技芸員に任命され、昭和28年には陶芸家初の文化勲章を受章しました。

波山は、理想の作品づくりのためには一切の妥協を許さず、端正で格調高い作品を数多く手がけました。代表作の一つ、重要文化財《葆光彩磁珍果文花瓶》は、大正6（1917）年波山芸術を愛した住友家15代当主・住友吉左衛門友純（号・春翠、1864-1926）が入手し、泉屋博古館東京に継承されています。春翠は、明治36年に兵庫・須磨海岸近くに建築家の野口孫市による別邸を、大正6年には東京・麻布に建築家の日高胖による別邸（現在の泉屋博古館東京一帯）を建てます。それらの洋館は、住居としてだけではなく、各界の名士や外国人向けの迎賓施設として用いられ、波山作品と共に妻・まるや長男・菊男の作品なども飾られました。本章では、住友コレクションと板谷波山記念館コレクションより、板谷ファミリーの作品を紹介します。

板谷波山《彩磁更紗花鳥文花瓶》
1919（大正8）年頃
泉屋博古館東京

重要文化財
板谷波山《葆光彩磁珍果文花瓶》
1917（大正6）年
泉屋博古館東京

特集展示：「住友コレクションの茶道具」

住友コレクションの茶道具の多くは、住友春翠によって収集されました。明治から大正時代にかけて政財界では、同好の士と茶の湯の世界を楽しむ人々が増え、春翠もその一人でした。高橋箒庵、野村得庵、嘉納鶴翁、三井泰山など財界人や住友の役職員、さらに日本画家の上田耕甫、能役者の大西亮太郎など、主に京阪で活躍した芸術家たちを招き、茶の湯や能などを楽しみました。

住友春翠は、歴代の住友家当主が集めた茶道具に自らの好みの道具を取り合わせ、客人をもてなしました。《小井戸茶碗 銘 六地蔵》は12代住友家当主・友親が晩年入手したもののお蔵入りしてしまった茶碗です。春翠は友親の追善供養の茶会で披露し、改めて《六地蔵》は小井戸茶碗の名碗として認識されました。

春翠自身は、唐物や江戸時代前期に活躍した京焼の名工・野々村仁清の作品など、典雅で端正な作品を収集しました。近衛家に伝来した仁清の《唐物写十九種茶入》などを通じて、春翠の美意識の一端を感じ取っていただければと思います。

《小井戸茶碗 銘 六地蔵》
朝鮮時代・16世紀
泉屋博古館東京

野々村仁清
《唐物写十九種茶入》
江戸時代前期・17世紀
泉屋博古館東京

《会期中のイベント》（予定）

※全て当日の観覧券が必要になります
※予約制のイベントは8月20日(火)ホームページにて受付開始予定（先着順）

記念講演会「モザイク作家・板谷梅樹を語る」8月 31日（土）14:00～15:00（要事前申込＊受付終了）
〔講師〕荒川正明 氏（本展監修者・学習院大学教授）

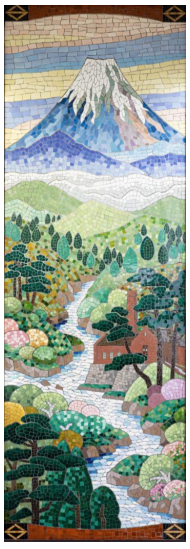
講演会①「古代モザイクの歴史と技法」 9月8日(日）14:00～15:00（要事前申込＊受付終了）
〔講師〕ヤマダカズキ氏（モザイク作家）

講演会②「茶道具・仕覆の修復について」 9月15日(日）14:00～15:00（要事前申込＊受付終了）
〔講師〕三浦和子氏（袋師）

〈アートWith〉レクチャー
「美術館学芸員の仕事とは―板谷梅樹展の場合」9月13日（金）17:30～18:30（要事前申込）
〔講師〕森谷美保氏（美術史家）
〔聴講料〕500円

学芸員によるスライドトーク　（予約不要・当日整理券配付）
9月5日（木）・12日（木）各 12:00～12:45
〔講師〕森下愛子（泉屋博古館東京主任学芸員）

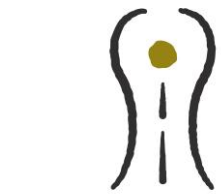
《貸出可能画像・キャプション一覧》

	板谷梅樹 《鳥》 昭和34(1959)年 個人蔵		板谷梅樹 《きりん》 昭和30年代 個人蔵
	板谷梅樹 《花》 昭和30年代 個人蔵		板谷梅樹 《笛を吹く人》 昭和初期 個人蔵
	板谷梅樹 《飾箱》 昭和10年代 個人蔵		板谷梅樹 《三井用水取入所風景》 昭和29（1954）年 板谷波山記念館蔵
	板谷梅樹 《莨箱》 昭和10年代 個人蔵		
	板谷梅樹 《ネックレス》 昭和20年代 個人他		板谷梅樹 《帯留》 昭和20年代 個人他
	＊泉屋博古館東京のみ出展 重要文化財 板谷波山 《葆光彩磁珍果文花瓶》 大正6（1917）年 泉屋博古館東京		＊泉屋博古館東京のみ出展 《小井戸茶碗 銘 六地蔵》 朝鮮時代・16世紀 泉屋博古館東京

《お問い合わせ先》

泉屋博古館東京　広報担当：橋本旦子　　展覧会担当：森下愛子(泉屋博古館東京 主任学芸員)

TEL: 03-3584-8136　FAX: 03-3584-8137　　E-mail：pr-tokyo@sen-oku.or.jp



泉屋博古館東京

SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM TOKYO